

第十六章 ダウンタウン・ヒーローズ

主だったメンバーが満州に行っている中、忘れ去られたように瀬戸内の孤島に取り残されていたお能ちゃんだったが、松山の県庁主催の新人研修に行く機会が訪れた。

獄門島出身の月野雫さんが考案したトットさん人形は、海が荒れて仕事に出られない島の女性たちにとつて格好の内職仕事になっていた。

四国本島に渡るお能ちゃんには、島の女性たちが作ったトットさん人形を月野雫さんに届ける役目も仰せつかった。

早朝、獄門島の港を出発した漁船は西条の港に到着した。

松平藩ゆかりの西条陣屋の跡地は、四方を掘りに囲まれた西条中学校になっていたが、城下町を思わせるたたずまいにお能ちゃんはしばし見とれた。

西条中学から駅に向かう途中に武家屋敷を思わせる月野家があり、日傘をたたんだお能ちゃんは犬神家から嫁いだ月野雫さんを訪ねた。

水疱瘡を患ったと聞いていたのでさぞや酷い湿疹状態を想像していたが、年齢以上にきれいな肌をしていた。入院中の病院食で、産地偽装した中国製のエビを使った練り物を食べてしまい、エビアレルギーを持っていた雫さんは満月の晩になると脱皮を繰り返すのだった。そのため、いつも若々しいお肌なんだとか。ドモホルンリンクルよりアレルギーの方が効くのか？と感心するお能ちゃんであった。

お能ちゃんは島民が作ったトットさん人形と犬神右兵衛からの手紙を渡した。

島民が作ったトットさん人形はすぐに売り切れるだろうから、材料を仕入れてまた追加発注すると月野雫さんは約束してくれた。

松山に行くなら、甥の清助に渡してほしいと着物を託された。

犬神右兵衛の妻は末の娘の波代を産んでほどなく病死してしまったため、四国本島に嫁いでいた月野雫さんが身の回りのことを気にかけていたが、清助は身なりがだらしないので特に気を使っていた。

学生なんてどこでも同じようなものですよとお能ちゃんは言ったが、お能ちゃんのコスロリ着物袴ファッションを見た月野雫さんは、あんたの方がぶつ飛んでねえかい？と思った。

月野家に来客があった。関サカエさんと言う近所の中年の女性だった。

サカエさんの息子の行男は清助の中学の先輩で海軍兵学校へと進んだ。後に敷島隊として特攻に赴き軍神と呼ばれる関行男の母であった。

清助が海軍兵学校への進学を望んだのはこの先輩へのあこがれが大きかったが、旧家の跡取りであるため親戚一同を巻き込んで説得を繰り返し、海軍兵学校をあきらめさせて松山高等学校へと進学させたのであった。

サカエさんはこの春、古物商を営んで行った夫を亡くし、古物商を廃業して草餅の行商をしながら一人暮らしていた。

お能ちゃんはサカエさんにもらった草餅を食べながら予讃線の蒸気機関車に乗り、海を右

側に眺めながら松山へと到着した。
松山の駅に着くと、県庁のトラックが出迎えに来ていた。お能ちゃん他五名の新人教師たちは道後温泉の安宿に泊まり、翌日から松山高校の教室を借りて一週間の研修を受けるのであった。

皆、松山から遠い山間地や島に赴いた教師たちや現地採用の代用教師であったため、東京からやってきたお能ちゃんは異色の存在だった。

女性教師は二人で、もう一人の女性教師の鬼龍院松江は土佐の生まれだったが、愛媛女子師範で学んでいた。卒業するなり宇和島で教師をしている男性と婿取りの条件で見合い結婚したが、その夫が兵役に取られたために教壇に立つことになった。

歳はお能ちゃんよりも三歳年上だったが、黒を基調とした着物姿や粋な立ち居振る舞い、パサソル(日傘)代わりの唐傘が妙に粋で色っぽいと思った。

鬼龍院松江先生はお能ちゃんのゴスロリファッションを見て、東京の人間は恐ろしいと感じていた。

初日は文部省と軍の教育担当者が来て教育指針について説明したが、そんな方針ごとごとく無視して島の「掟」で動いているのが現状だった。

休憩時間に、松江先生と二人になった時に、獄門島での教育の実態を話すと

「田舎は何処でもぶつちゆようなもんぜよ(同じようなもんですよ)。ほきも(それでも)、優れた人間は田舎から出て来るもんぜよ。あたしらはその手伝いしちようようなもんやき。めつそう深刻に考えることじゃないがや。」

土佐弁で言われるとなんとなく説得力がある。お能ちゃんは坂本龍馬が活躍できたのはこの土佐弁の説得力のおかげなのでは?と思った。

研修の現場になった松山高校ではメツチエン先生(女先生)が来ていると、学生たちが様子を見に来ていた。お能ちゃんから見たら年下の子供っぽい男の子たちに見えていた。

「ちくつとそこの学生!」

学生達から不用意なからかい言葉が飛び出したとたん、松江先生は一人の男子学生の胸ぐらをつかみ、

「うちは土佐の侠客、鬼マサの娘、鬼龍院松江じゃ。なめたらいかんぜよ!」

切れ長の鋭い目線で学生たちを睨みつけると、先ほどまで騒いでいた学生達は「鬼の松江じゃあ。」と、蜘蛛の子を散らしたように逃げ去り、胸ぐらをつかまれた学生は腰が抜けてしりもちをついてしまった。

恐ろしいお父さんをお持ちの松江先生だったのだ!この人と結婚した男性も度胸があるんだなあ。とお能ちゃんは思ったが、自分の父親が軍の武術師範であることなど全然気にしていなかった。さらに、松江先生も松山で名を知られた怖いおねえさんだった。

土佐の親分さんの娘と、西洋の悪魔使いのような風体をした女教師が二人、危険だから近寄らないようにと校内に噂が飛び交ってしまった。

「お能先生!」

研修が終わって帰り支度をしていた時に、犬神清助が訪ねてきてくれた。犬神家と、西条の雫さんに頼まれた届け物があるので、寮に行くこうかと思つているところだった。

犬神清助は寮の仲間を連れていた。学生服ではなく、古臭い袴と着物に学生帽をかぶった柳葉敏郎に似た小生意気そうな学生だった。清助君たちが住んでいる東寮の代表をしているオンケル(おじさん)と言う青年だった。その隣にはおとなしそうな富田と言う青年を連れていた。オンケルは松江先生に

「ご無沙汰しとります！」

と一礼したので、松江先生に用があつて来たのかとお能ちゃんは思った。ところが、

「実はお能先生にお願いがあつてこちらまでうかがいました。」

そのお願いとはこの週末に開催される文化祭の前夜祭で、各寮の対抗戦になる演劇大会があるのだが、女性のヒロインの役がないと言う話だった。高等女学校の演劇部の女学生にお願いしたのだが、急に全員の身内に不幸ができて出られなくなったと言うのだ。

「おんしたちが女の扱いを知らんから逃げられたんやか？」

松江先生がぐさりと突き刺さる一言を投げつけた。そう言われるとそれまでだった。

東寮のオンケルは、この舞台の台本は十九世紀のドイツ人作家、フリードリッヒ・ヘッベルの小説「理髪師チッターライン」を元に、ここにいる富田が書き上げた力作の台本、ヒロインのアーガートを演じてくれる女性がないので是が非でもお能先生にお願いしたいと説得した。

脚本を書いた富田祥資(とみたよしすけ)は後に早坂暁と言うペンネームで、「夢千代日記」などの脚本を手掛ける。この演劇事件をはじめ学生生活は後に映画「ダウンタウン・ヒーローズ」として描かれ、ヒロイン房子は薬師丸ひろ子が演じた。

お能ちゃんは台本をもらい、今夜読んでから返事をする、道後温泉の宿屋に戻った。

演劇会があるのは研修が終わって島に戻る前日の休日だった。出来れば、「坊っちゃん」ゆかりの場所をマドンナの姿をして歩いてみたいと、マドンナ衣装を持って来ていたのだが、少し西洋風に改造すればヒロインの衣装に使えるかな?と考えた。もちろんゴスロリ調。

温泉から上がってきたお能ちゃんが部屋に戻ると、松江先生が台本に目を通していた。

「ようできた台本や。おまさん、演じてみてはどうやか？」

「でも稽古する時間もないし、私が出演するなんて。」

「なんや、自信がないのか。」

自信がないどころか、やる気満々なんだけど、一応はにかんで見せるお能ちゃんであった。

「うちは女子師範におったころ新劇やつとつてのう。こういう物語は大好きや。」

「演じていたんですか？」

「演出や。オンケル言う学生がいたら、わてえが卒業の年に高等学校に入ってきた子や。あいつら生意気にこの世を謳歌しいちよるが、まだほんの子供ゼヨ。あんた、演劇の経験はあるかや？」

「新劇ではなく旧劇なら少々。」

少々どころか、能狂言あらゆる舞台に活躍していたお能ちゃんは舞台度胸の塊だった。

「まあ、この台本読んでみい。田舎芝居思うてなめたらいかんぜよ。」

演劇、音楽、ことうした芸能分野で地方の力を甘く見ることはできない。舞台に出会う機会が少ないけれど、粗悪な素人芸も見る機会が少ないので、多少手を抜いても地方回りに来

るプロの芸しか接していない。そのため、予想外に高いレベルを目指しているのが「知らない強さ」でもある。お能ちゃんは布団にうつぶせになって台本に目を通した。夜でもこの明るさ。獄門島に来てからランプの生活だったので、電球の灯りが嬉しく感じた。

翌日、半分寝ながら研修を受け終わると、松江先生と一緒に東寮に向かった。東京帝大朴念仁をさんざん見てきたが、彼らより若い分ガサツさと汚さは増していた。朴念仁軍団でもっとも優れたダラシナ系の与一君が清潔に見えるような学生ばかりだった。

早速台本の読み合わせが始まって学生たちが度肝を抜かれたのは、お能ちゃんがわずか一晩で全てのセリフを憶えて来たことだった。台本に目もくれずセリフのやり取りをするお能ちゃんを「きつと東京のプロに違いない」と学生たちは思った。

「たつすいはいかんゼヨ！」

松江先生の怒声に台本を読んでいた男子学生は凍り付いた。薄いのはいけないと言う意味だが、男子学生のセリフまわしに熱意が感じられなかったことをこの一言で貫いた。

松江先生の目配りだけで配役の男子学生達の読み方が変わってしまう。演出家とはこういうものかとお能ちゃんは松江先生の動作に注目していた。

表向き監督のオンケルは腕を組んでウンウンとうなづいているだけだった。

男子学生たちが演技指導を受けている間、お能ちゃんは他の寮の出し物の練習を見てきた。能を練習している学生たちもいた。女子高の演劇なら宝塚に代表されるように受け入れやすいが、男子校で男性だけの新劇は何ともむさくるしい思いがしていた。能のように男性だけでも演じられる古典芸能はやはりこの日本に似合っていると思った。

学生達が練習していたのは鬼婆を題材にした「安達ヶ原」だった。かなり荒っぽい物語なので男子学生がやるにはうってつけかもしれないが、あまりにもガサツすぎるのでつい乗り込んで指導を始めてしまった。

前シテの里の女の演技はまあまあさまになるが、後シテの鬼婆の役が何とも頼りない。

「金春流なら、こう演じるけど、宝生流なら動きがこう違うの。あなたたちどの流派？」

「しいて言うなら我流じゃがなもしい。」

結局、鬼婆役の学生はワキツレの山伏になり、お能ちゃんは監督兼、後シテの鬼婆を演じることになってしまった。

こうして男子高等学校の文化祭を乗っ取ってしまったお能ちゃんだった。昼間は研修を何とかこなし、夕方から深夜まで新劇と古典芸能をこなし、温泉から上がると松江先生と演劇論を語り合う。学生時代より充実した学園生活を過ごしているような気になった。

新劇を演じながら、ドイツ文学の「悲劇」は割と浅いものだなとお能ちゃんは考えた。松江先生が「たつすい」と言っていた意味は作品にあつたのではなからうか？淡々と演じている日本の能の物語の方がよほど悲劇と悲哀をはらんでいるような思いがした。

松江先生と「鬼」について話し合った。松江先生の姓は鬼龍院と言う毒々しい姓。お能ちゃんの住む獄門島の村の名が鬼首村。鬼と共存しているような世界に思えた。

「わてえが務めとる学校のあたりは鬼北(きはく)言うんや。宇和島との間にある鬼ヶ城

山の北つちゆう意味や。さしづめわてえは鬼北の鬼嫁やなあ。」
と笑った。黙っている鬼のように威圧感を感じるが、喋ると気さくな人に感じた。

寝不足で、寝てはいけないとそれこそ鬼のような形相で研修を受けるお能ちゃんに、講習をする側もその気迫に押されていた。

ほかの男性の教師は兵役に取られた教師の後に入った新人教師たちだったが、兵役の検査で乙や丙に振り分けられるだけのことはあつて、見るからに病弱そうな男たちだった。が、女性教師たちの活躍に後押しされて、研修が終わると学生たちに混ざって舞台作りなどを手伝っていた。

「今回は熱心な先生たちが来てくれましたねえ。」
と県の教育関係者も喜んだ。

研修の最終日は京都から日本を代表する学者の説博士が来て、これからの科学を担う若者を育てる講演会が行われるはずだったが、説博士は海軍から委託を受けて満州に行つてしまったために、急きよ坂本先生と言うベテラン教師が公演に来てくれることになった。坂本と言うのだから、きつと土佐の人で龍馬の姻戚の人かもしれないとお能ちゃんは期待したが、福岡から来てくれた先生だった。

「かあちゃんが怒りしなんの、そりやあ当然ですな。とうちゃんは給料ば一晚で飲んで使つちもうたんだから。怒つたかあちゃんはなんぼしよつたかつて言うつと、とうちゃんのネクタイば両手でむんずとつかんで絞り上げるとよ。そしたら、ほら、ピタゴラスの三角形の定理ば知つとうや！その原理で、とうちゃんの首ば締め上げたとですよ。」

「あんたを殺して、あたしも死ぬう」言いよつてな、とうちゃんの首ば閉めあげつとですよ。まあ、ほんなごつ修羅場ですな。私はそんな環境で育つたとです。」

坂本先生は笑いを交えて教師の在り方を説いた。上から押し付けるだけの文部省や軍部の話よりもよほど説得力があつた。同じ目線まで降りて語れる重要さを学んだお能ちゃんであつたが、安徳君の九州弁のことを思い出していた。松江先生の土佐弁と言ひ、安徳君や坂本先生の博多弁。地方の言葉の持つ説得力に、自分の東京言葉は軽いのではなからうか？と不安に思った。安徳君に九州弁を教わつておけばよかつたと思つた。

「よかですか皆さん。教え育むつて書いて”教育”と読むつちやよ。教えるは一瞬やけど、育むは長あか時間をかけにやできんもんですばい。どうか皆さん、長あい手間暇をかけて子供たちは育んでやつちくれんね。」

なんだかよくわからないけど坂本先生の話に研修所の先生たちは大感激をした。「なんだかわからない感動」が重要なかもしれないとお能ちゃんは学んだ。

数日間ではあるが高等学校の寮生と接してみて、幼い児童に教えるより高等学校の学生に教える方が楽だと思つたが、「教える」と「育む」に分けるなら、今の自分の役割は「育む」に重点があるのだと察した。

研修会は終了し、男性教師たちも寮生に混ざつて舞台作りが始まり、金槌の音が響いた。例年はない盛り上がり地に地元の人たちもサツマイモなどの差し入れをして応援してくれた。東京では感じられなかった学生と地域の密着性をお能ちゃんはうらやましく思えた。

松江先生の演出補助によつて新劇の演者の演技が全く違つてきたので、表向き監督のオンケルなどもはや監督とは名ばかりだったが、さも自分の力量であるかの如く腕を組みながらウンウンと頷いて見せるのだった。

前夜祭当日、お能ちゃんがヒロインを演じた「理髪師チッターライン」は優勝を獲得し、鬼婆のシテを演じた「黒塚」は特別賞を受賞した。他は男ばかりの演劇だったのでむさくるしいこと野暮なこと、レベルが違いすぎた。

瀬戸内の島では野菜に事を欠くだろうと学生たちの家族や周辺の人々がトラック一台の野菜を集めてきて、今治の港まで乗せて行つてもらえることになった。

松江先生と再会を誓い、東寮の学生たちに見送られ、ゴスロリマドンナ先生は松山を去った。途中、大きな病院の近くで、キティーちゃんジャージを着た親子が歩いていた。

「こちらにもぶつ飛んだ人がいるんだな。」と通り過ぎたお能ちゃんだったが、満州旅行に行つているほおでえさんの夫と息子だった。

船に大量の野菜を積み、意気揚々と獄門島に凱旋するお能ちゃんであったが、腕に湿疹ができていた。むさくるしく不衛生な学生寮に行ったので、シラミかダニにやられたものだと考えられた。宿舎に戻ったら全部洗濯して天日干ししようと思った。

”獄門島で謎の伝染病。パンデミック！島ごと封鎖！”の記事が愛媛ローカル誌の一面を飾るのは数日後だった。

お能ちゃんが獄門島に持ち帰ったのは大量の野菜と水疱瘡だった。

「奥道後温泉」

本家道後温泉のはるか山奥にたえずむ人影があつた。道後温泉を通り過ぎて山奥の奥道後温泉に入りこんでしまったらしい。

話が突然四国に飛んだので慌てて大連から駆けつけてきた秋田のネロさんだった。

「ハイハイ」